

平成26年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査-3号)

農林総合研究センター
平成26年6月9日調査

気象経過

1. 5月第6半旬の気象は、平均気温が、金沢、輪島とも平年に比べかなり高く（金沢：+3.8℃、輪島：+3.5℃）、晴天日が続き、日照時間は、金沢、輪島とも平年に比べかなり多く（金沢：142%、輪島：147%）なった。降水量は、金沢、輪島ともに平年並（金沢：107%、輪島：116%）となった。
2. 6月第1半旬は、平年に比べ平均気温は金沢、輪島ともかなり高く（金沢：+4.7℃、輪島：+3.3℃）、日照時間は金沢、輪島ともかなり多く（金沢：130%、輪島：147%）、降水量は金沢、輪島ともかなり少なかった（金沢：19%、輪島：8%）。
3. 6月5日に梅雨入りし、平年（6月12日頃）に比べて7日早くなった。
4. 6月5日発表の向こう1か月の予報では、平年に比べ曇りや雨の日が少なく、平均気温は平年並〜高い確率が40%、降水量は並〜少ない確率が40%、日照時間は並〜高い確率が40%の見込みです。気温は1週目で、並〜高い確率が40%、2週目は、並〜高い確率が40%の見込みです。

生育概況等

【生育状況】

1. 茎数は、コシヒカリが加賀地域で平年比79~132%（平均99%）、能登地域で平年比97~131%（平均111%）と、加賀地域で平年並、能登地域でやや多くなっている。ゆめみづほは加賀地域で多く、能登地域でやや多く（近年比：加賀121%、能登116%）なっている。
2. 前回調査（5月28日）からの分けつは急激に増加しており、コシヒカリの生育観測田では、中干し開始茎数（14~16本/株）を上回っている圃場が79%に達しており、400本/m²を超えている生育過剰な圃場もみられる。また、ゆめみづほにおいても同様に中干し開始茎数（16~18本/株）を上回っている圃場が79%に達している。
3. 葉齢は、コシヒカリが加賀地域で+0.5葉、能登地域で+0.3葉、ゆめみづほが加賀地域、能登地域ともに+0.7葉、葉齢展開からみた生育の遅速は、コシヒカリで平年に比べて1~2日早く、ゆめみづほで近年に比べて3日早い。
4. 草丈は、コシヒカリが平年比95~125%（平均112%）と長く、ゆめみづほも近年比98~136%（平均117%）と長い。

【病害虫の発生状況】

1. イネミズゾウムシ及びイネヒメハモグリバエによる軽微な食害が見られる。
2. 雑草で斑点米カメムシ類が確認されている。
3. 6月5日~7日にかけて加賀山間部でBLASTAMによるいもち病の感染好適日が出現した。

当面の対策

1. 5月上旬田植えの圃場では、中干し開始時期に達しているので、中干しを実施していない圃場では直ちに開始する。
2. 5月中旬以降に移植された圃場でも、目標茎数70%に達した時期、もしくは移植後1ヶ月のいずれか早い方に合わせて中干しを早急に開始する。
3. 中干し程度は、田面に小さなヒビが入り、軽く足跡がつくまでとする（図1）。生育過剰なほ場や肥沃なほ場は強めに行うが、大きな亀裂が生じるほど長期間の落水をおこなうと、根が切断されるので注意する。
4. 田干しの遅れにより下葉の黄化が見られるほ場では、早めに、中干しを実施すると共に稲体の健全化を図るため、ケイ酸質資材を施用する。
5. 中干し時に水田の水がスムーズに排出されるよう、溝切りを実施する。溝切り間隔はほ場の排水条件に応じ10~15条間隔とし、溝と溝及び末端を排水溝に連結する（図2）。

6. 用水量が十分確保できない地域においても、根の活力向上を図るため、田面に亀裂を生じない程度に中干しを実施し、湛水状態とはしない。
7. 葉いもちの早期発見に努め、初期の防除を徹底する。補植苗の本田放置は、葉いもちの伝染源となるので早急に除去する。
8. いもち病箱施薬を行っていない圃場では、必ず予防粒剤を散布する。散布時期の目安は田植時期にかかわらず、加賀平坦部で6月15日頃、能登平坦部で6月20日頃である。ただし加賀、能登地域とも常発地は直ちに散布する。
9. 過去に白葉枯病が多発した地域で、予防剤を箱施薬していない場合は、白葉枯病の防除適期に合わせ、6月20～30日に予防粒剤の薬剤散布を行う。
10. 斑点米カメムシ類の発生密度を下げるため、生息場所である畦畔や農道の除草を徹底する。除草は、集落など地域全体で一斉に実施すると効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。



図1 中干し程度



図2 溝の連結